

の、そこにはキャンプ・リーダーがいる訳でもなく、ましてや食事の面倒見るといったスタッフは皆無である。そこへ40余名ものこれまた余り山の経験のないものをおまけに山には素人の担任が引率していこうというのだから、めくら蛇におじずの感がある。それ故生徒のグループも山での研究を中心としたグループと炊事を中心としたグループとに分れる。そこでまた担任はまったく恐怖とまで言っても過言ではないと思うが、生徒たちの食事の献立にまで顔をつっ込むことになるのである。もうそれはだまっていられないのである。何故って、担任もそれをいっしょに食べることになるのだから……。

夏休みに入ってもあとは出発を待つばかりとはいかない。出発の前日に10食分近い食料の買い出しをしなければならぬ。これが頂度猛烈に暑い時で大変な労力である。またその割には物が腐りやすいときなので

高カロリーの材料を持っていけないのも問題である。

いろいろ苦勞したあげく現地に到着するのだが、そのまたバスで通る道が、山また山の断崖絶壁で、車のすれ違いも満足に出来ないという地獄の入口では楽しい山の生活どころではない。とにもかくにも無事学荘に着くや否やこれまた担任は神経の休まるときがないのである。やれ食事の用意、やれ入浴、やれ夜のミーティング、夜半は夜半でなかなか静かに寝ない者がかなりいてゆっくり休むことができず、一時たりとも身も心も開放されるときがないということは大きな問題である。

以上林間学校における種々の問題点を述べてきたがまだまだここに取り上げることができなかつた様々の問題点が多々あるが、今後いろいろな学校行事と関連してあらゆる角度から、より良き方向に前進するよう多角的に研究を行いたい。

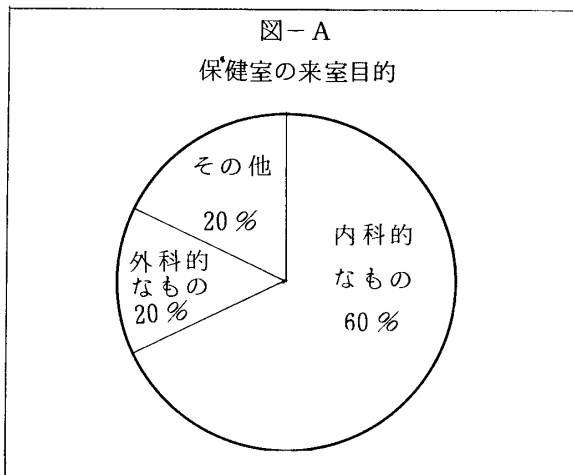
## 〔VII〕 保健室における生徒の実態について

今 治 富 美 子

### I はじめに

保健室では、急病人や外傷などの救急処置を行なう所でもあるので、学校中で一番静かな場所だと受けとられるかもしれない。しかし、本校の保健室は、学校中で一番にぎやかな所ではないかと思う。日によって差はあるが、保健室には一日平均30人前後の生徒がやって来る。それらの生徒を来室の目的から分けると、だいたい3つに分類できる。(1)内科的なもの (2)外科的なもの (3) その他である。

その割合は、図-Aに示す通りである。それぞれにつ

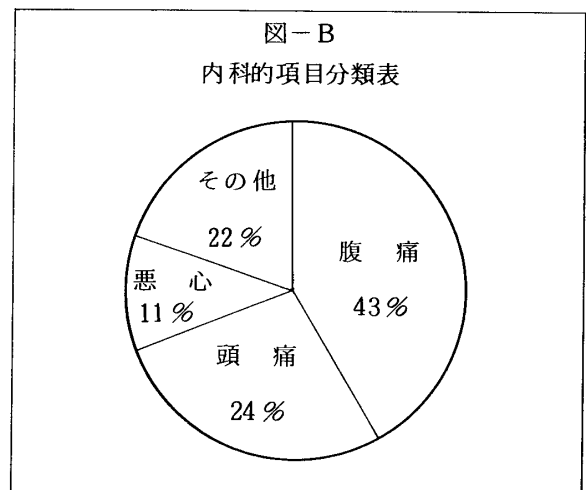


いて気がついたことを述べてみたいと思う。

### II 保健室の現状について

#### (1) 内科的なもの

図-Aでも解るように、これが保健室にやって来る生徒の約60%を占めている。訴える疾病異常は、頭痛、腹痛、悪心などで、その割合は、図-Bに示す通りで

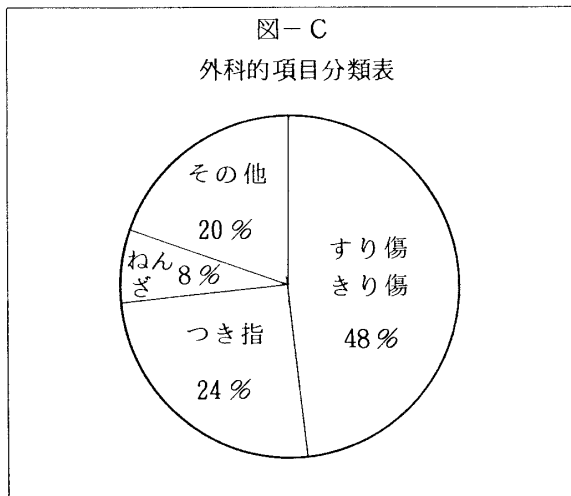


ある。この場合、生徒は1人で来ることは少なく、たいてい2人以上で来る。これは特に女子に多く、中学生に多い傾向にある。生徒達は、「先生、お腹いたい

ら薬ちょうだい」と言ってくる。薬で全てが解決できると思っているらしい。ひまがあれば薬について多少なり話せるのだが、時間がない場合が多いので、顔色、その他から判断して「そんなのだいじょうぶ」と説明して帰す。すると「先生のケチ!」「ここにある薬は、国の金で買うんでしょ、先生が損をするわけじゃないからいいじゃないか!」「薬をのむと治ったような気がするから!」「気安めになるから」などと言う、こちらがあっけにとられてしまうこともしばしばある。正しい保健知識をどうやって、生徒に身につけさせるか、今後の課題だと思う。また、このような疾病異常を訴えてくるのは、月曜日や祝日、体育行事、遠足、文化祭などの行事の次の日に多くなっている。休日の過ごし方、日頃の運動不足、気のゆるみなど、いろいろ問題があるだろうが、今後、この傾向を具体的に調査して、例えば、休日の過ごし方と休日後の訴えとの関連について検討したいと思う。

## (2) 外科的なもの

外科的なものとしては、すり傷、きり傷、つき指、ねんざなどがあり、その割合は図-Cに示す通りであるが、体育の授業内容や行事等でこの割合は変化する



しかし、つき指、ねんざは多く、シップ薬がすぐなくなるのが現状である。また、骨折が考えられないことで起る。例えば、友達とふざけていて、うでをねじられて骨折ということもあった。すり傷などでも、俗に「つばをつければ治る」などと言われる小さな傷でも、さも大事のように保健室にかけこんでくる。特に、これらは中学生に多く、高校生になると減少するように見受けられる。このような保健行動の変化が彼らの成長にもなう意識構造の変化とどのようなかわりをもっているかは極めて興味ある問題である。

## (3) その他

この場合いろいろあるが、その中で悩みごとの相談

をとりあけてみる。実例を挙げてみる。高2男子、9月のある日授業中に腹痛だといって、保健室にやって来た。しばらく休養させることにした。丁度高2の健康診断票を整理していたのだが、それを見ていて、そのうちにある女子の名前を目にとめて、この子かわいいよ などと言いだした。その時間はそのまま教室にもどったが、放課後話があるといってきた。そしてあの女の子が好きで交際を申し込んだが、ことわられた。しかし、その後なぜか自分の気をひくようにみえるので、彼女に真意を確かめてほしいということだった。彼女に尋ねたところ、ことわったことにまちがいが無いとのことだった。彼に真意をどのように話せばよいか、いろいろ考えたが、結局、率直に話した。話し終った途端、保健室をとおび出してしまった。これには本当にびっくりしたが、無事見つかった。失恋のショックは大きかったらしく、しばらくは元気がなかったが、今は、元気に登校している。

このように、大人にとっては、たいした問題ではなくても生徒達にとっては、重大な問題になることも多々見受けられる。よって、このような問題をどこかで受けとめてやるのが本人にとって、非常に大切なことだと思う。従って保健室の日常にこのような事も、話すことのできる自由な雰囲気をつくることも、軽視してはならないと思う。

それと同時に「性」についても見すごすわけにはいかない。中・高校共に、かなりの関心をもっている。保健室にある本のベストセラーは「がま先生の性教育高校生の部」と「性教育をめぐる問題事例」である。前者は写真や図が多く、生徒は、文章を読むのではなく、それらを見るだけであり、後者は、売春、性犯罪など実際にあったことが書かれており、週刊誌のように興味本意に読んでいる。これらの本は、特に中学1.2年の男子がよく読んでいる。これは、中学生がまだほかでは、そのような本を読むことができないからだと思う。しかし、要は、その内容のとらえ方で、彼らがこれらの本をどのようによんでいるか、今後、彼らと接する中で興味をもつ点、あるいは、正しい理解の程度などについて、検討してゆく必要があると思う。

以上が、大まかにはあるが、保健室の現状と問題点である。

## III おわりに

先月、ある生徒が「学校でホッとできるのは、保健室だけ」と言っていた。この生徒は、保健室では、よくしゃべり、他の生徒のせわをしたり、私には活発な生徒に見える。しかし、他の先生は、おとなしい生徒だと言われる。このように、保健室は、教科と関係がないため、生徒にとって気安い所となっている。それ

故、かえって生徒のいろいろな面を知ることでもできるが、反面、さばる口実を与える所にもなる。従って、他の先生との連絡を密にし、生徒一人一人を把握していかなければならない。が、それは、むずかしく、こ

こにあげただけでも、問題点は様々である。

今後は、これらの問題について、少しずつ、調査、検討を重ねていきたいと思う。

## 〔Ⅷ〕 高校生の進路選択について

白 井 宏

昨年度(51年度)高校3年生を担当することになったのを機に、高校生の進路選択の状況、進路指導のあり方等について、ケーススタディ的に、そしてかなり長期的に(大学卒業、就職という時点まで)追跡してみようと考えた。本稿ではその初年度における研究結果の素描を報告し、現時点におけるわれわれの問題意識を整理してみたい。

### (1) 進路選択の現状

本校では卒業生の殆どが進学する(51年度は138人中1名のみ就職)。従って進路指導とは概ね進学指導ということになる。そこでわれわれは、生徒各自の人生選択と大学選択とをどのように重ね合わせて行くかということを進路指導の最重点目標として設定した。そしてそのためのアンケート調査や面接指導を何度か積み重ねたが、結果としては成功したとは言いがたい。つまり、入試の最終段階に近づくにつれて、われわれも生徒も、結局は、進学予備校や受験企業の作った合格難易度ランキング表等による大学選択へ指導や関心へ力点を移さざるを得なくなったのである。又「〇〇大学ならば何学部でもよい。」という考え方も、学歴社会の現状を考えると、完全に無視否定できるものではないというのが本音である。

### (2) 進路選択の条件

条件は大きく分けてア 内的条件、イ 外的条件の2つに大別され、さらにそれぞれについて細かく分けられる。

- ア 内的条件— 好み・希望・夢  
それらの発生・持続・挫折などの現象とその要因。
- イ 外的条件— 家庭 生活階層・地域的風土・保護者の職業・兄弟の数等。  
社会 男女の性差  
学校 教科(得意不得意・好き嫌い)・教師の指導・友人の

助言等。

その他 受験雑誌の情報・進学塾  
模擬試験の結果と判定等

これらの諸条件はそれぞれが複雑に絡み合いつつ、微妙に進路選択のダイナミズムを形式している。生徒の書いた作文や面接の際のことばなどから、非常に大きな要因として浮かびあがってくるもののひとつは、教科である。ある教科に対する得意不得意、好き嫌いそれと、大学学部の入試科目の数、内容の特徴、ある教科で受験することの有利不利。そういう教科に関する条件は非常に大きいと考えられる。

### (3) 受験生の精神状態

受験生活(あるいはもっと大きく高校生活)を表わすことばとして、「灰スクール」「四無主義」「受験戦争」などということばが使われるようになってすでに久しい。「大学入試」という現象をことさら過少評価するつもりは全くないが、われわれ大人やマスコミがこういう激越なことばで呼んではいないが、当の本人、受験生達はもっと違った意識を持って過しているのではないだろうか。担任としての私の一つの感想である。

高校3年生というものはこういう立場であると半ば当然のことと考え(「受験体制」や入試のための勉強の意味)などについてはあまり考えず、入試あるいはそのための勉強を必要悪のように考え、首尾よく合格すれば、その苦しかったことも、ある懐しさをもったひとつの思い出とする。そういう態度がかなり見受けられるように思える。

次に示すのは「私の進路—過去・現在・未来」という題で12月に書かれた作文の一部である。

「過去……私、先生になりたくってさあ、コンピューターの占いをしたら「教師とか社会的奉仕をする職業に向いている」って出たもんだから。私にはこれしかない、などと思ったり……目をつむれば生徒を教えている自分の姿がありありとうかんだり……とにかく自分勝手に満足しておりました。(中略)